

主 題：偽預言者たちに惑わされるな⑦ 彼らをさばかれる主
 聖書箇所：ユダの手紙 15-16節

ユダの手紙をお開きください。

神に逆らう者たちには必ず神の正しいさばきが下る。神のさばきの日、主の日は必ず訪れるから、しっかりと真理に立ち続けていきなさい、それがユダが教えたことでした。

教会の中に入り込んで来た偽りの教師たちは、主の日に関して誤った教えをしていました。彼らは主イエスの来臨そのものを否定していました。イエス様は帰って来ないと。「終わりの日に、あざける者どもがやって来てあざけり、……次のように言うでしょう。『キリストの来臨の約束はどこにあるのか。先祖たちが眠った時からこのかた、何事も創造の初めからのままではないか。』」、2ペテロ3:3b-4でペテロはこう言っています。にせ教師たちがこんなことを教えたのは、彼らにとってさばきがあると困るからです。彼らは自分の肉に従って快樂のままに、欲望のままに好き勝手な生活をしていました。そのような生き方を継続するためには、さばきがあってはまずいのです。そこで彼らは主の日が来ることは信じがたい、何も変わってないと信じ、このように教え、自分たちの好きなように生きるという生き方を継続し、人々を惑わしていたのです。ですからユダは必ず神のさばきが来るのだということを明らかにするのです。

A. 神のさばき

必ず主の日は訪れ、神のさばきは実行されると教えるユダ、15節から神様がさばきをもたらす理由を記してくれています。そのことを続けて見ていきたいと思えます。

先週、14節の最後で「連れて来られる」という動詞を未来のことなのにあえて過去のこととして記しているのは、それが必ず起こるからであると説明しました。15-16節でもユダはそのように記しています。彼が言いたいことは明らかです。必ず神のさばきの日が来るということです。そしてユダは教会の中に入り込んできたにせ教師たちがいかに危険なのかということを教えます。彼らは自分たちの生き方をもって、教えをもって人々を惑わすということをユダは暴露していきます。

1. さばきの対象

1) すべての不敬虔な者

まず15節を見ると、「すべての者にさばきを行ない、不敬虔な者たちの、神を恐れずに犯した行為のいっさいと、また神を恐れぬ罪人どもが主に言い逆らった無礼のいっさいとについて、彼らを罪に定めるためである。』」とあります。14b節「見よ。」というところからかぎ括弧が始まり、15節の終わりで閉じられています。前回見たようにユダは外典であるエノクの書から引用したのです。聖霊なる神がそれを使って大切な真理を教えようとしたのです。15節の初めに「すべての者にさばきを行ない」とあります。この箇所はこの神のさばきの対象は「すべての者」と教えています。では一体「すべての者」とは誰を指しているのかです。文脈を振り返ってみると、神に逆らう者たち——神に背を向けて生きる人たち、神の救いを拒み続ける者たち、神の教えに背く者たちに対する警告が記されていました。必ず神の審判があると。ユダ4節を見ると「というのは、ある人々が、ひそかに忍び込んで来たからです。彼らは、このようなさばきに会うと昔から前もってしるされている人々で、不敬虔な者であり、私たちの神の恵みを放縱に変えて、私たちの唯一の支配者であり主であるイエス・キリストを否定する人たちです。」とあります。イエス・キリストの救いを信じようもしない、神が教えておられる歩みに全く無関心な人たち。しかも人々を惑わすような、そういう人々が教会の中に入り込んで、今まさにこの教会がこういった危険に直面していることに気づいたユダは、当初は救いについて手紙を書こうとしていたけれども、3節「聖徒にひとたび伝えられた信仰のために戦うよう」に勧める手紙を書いたとあります。現状を知って、手紙の内容を変えたのです。ですからここで言う「すべての者にさばきを行ない」の「すべて」というのは、神に逆らう者たち、すべての「不敬虔な」人たち、もっと言えば、神の敵であるすべての人たちです。確かに私たちクリスチャンもキリストのさばきの座に着きます。でもご存じのようにこれは罪がさばかれる場所ではなくて、クリスチャンとして生きた歩みの褒美をいただくところだということは皆さん十分ご存じだと思います。ですからこの15節の「すべての者」というのはさばきに服する者たち、神に逆らっているすべての者たちということになるのです。「すべて」と言われている以上、このさばきから漏れる罪人はひとりもないということです。

さて、この15節は訳が大変難しかったと思います。あることばが何回も繰り返されているのですが、新改訳では同じことばを繰り返してはいません。15節「すべての者にさばきを行ない、不敬虔な者たちの、神を恐れずに 犯した行為のいっさいと、また神を恐れぬ罪人どもが主に言い逆らった無礼のいっさいとについて、彼らを罪に定めるためである。』」の下線を引いた部分は、あるギリシャ語が形容詞形や名詞

形、そして動詞として使われています。すべて「不敬虔」、また今までの日本語の聖書だったら「不信心」と訳していることばです。これは私の訳ですが、この箇所をできるだけ原語に忠実に訳すようになります。「すべての人にさばきを遂行し、そしてすべての不敬虔な者たちに有罪を宣告する。それは不敬虔に生きた彼らのすべての不敬虔な行い、また不敬虔な罪人が神に背いて語ったすべての暴言のためである。」と。「不敬虔」ということばが続いているから聞き辛かったかもしれませんが、誰がさばきに服するのか、不敬虔な者たちだとこの箇所は教えます。では「不敬虔」とはどういうことかということ、神を信じない者たち、不信心な者たちです。またこのことばには、神を敬わない「不敬」や神に対して非常に傲慢な「不遜」、また非礼であるとか、礼儀がないとか、神を軽視するといった意味があります。それだけ聞いてもどんな人々だったのかがわかります。彼らは神を信じないだけではなくて神を敬おうともしないし、神に対して大変傲慢でもあるし、そして神を軽蔑しているような人々です。

2ペテロ3：7にも今の天と地はさばかれるのですが、こう書いてあります。「火に焼かれるために（今の天と地は）とっておかれ、不敬虔な者どものさばきと滅びの日まで、保たれている」と。今のこの天と地は不敬虔な者どものさばきと滅びの日まで保たれていると。火に焼かれるその日までこの地は保たれていると。しかもそのさばきというのは火によってさばかれると。だれがさばかれるかということ、不敬虔な者どもと書いてあります。そのさばきの日が来るまで保たれているのだと。

2) すべての罪

さて、さばきについて15節は「彼らを罪に定めるため」だと続きます。この「定める」というのはおもしろいことばで、これは確かに「罪や過ちを責める」とか、「それらを激しくとがめる」という意味もあるのですが、「暴く」とか「摘発する」という意味です。つまりこの不敬虔な人たち、神に逆らい続けてきた者たちが受けるさばきの時に、その人たちのすべての罪が明らかにされるとユダは教えます。1ペテロ4：5に「彼らは、生きている人々をも死んだ人々をも、すぐにもさばこうとしている方に対し、申し開きをしなければなりません。」とあります。これは自分のすべてのことについて弁解する、説明するということです。なぜこんなことが書いてあるかと言うと、我々人間はみんな創造主に対して責任があるということです。罪またサタンは、人生は自分のものだから、地上にいる間自分の人生を好きに生きて楽しめばいいとだまします。しかし、聖書が我々に教えてくれているのは、神によって造られた私たちは神の所有物だから、この神に対して責任を負っているということです。この神を愛して、この神に従っていく。でも残念ながらその選択をしなかったのです。

神の前に立った時に自分の人生の説明をしなければいけない。そこで実際に自分が行った罪が明らかにされます。また神がこうなさいと言われたのをしなかった罪が明らかにされます。また人の前で犯した罪が明らかにされます。そして隠れた所で犯した罪が明らかにされます。でもここで弁解したからと言って、神はそれを聞いて「ああ、そんなことがあったとは知らなかった」とは言われません。神はすべてのことをご存じです。その時に悟るのです。自分が神のさばきにふさわしい存在だ、神のさばきを受けるにふさわしい罪を犯したことに気づくのです。「申し開きを」する時が来ると、ペテロがそのことを私たちに明らかにしてくれました。恐ろしいのは、罪が明らかにされる時に、誰も弁護してくれないのです。

感謝なことに、私たちクリスチャンに対しては全く違う教えがされています。サタンは私たちが神の前で日夜訴えていると言います。「あのクリスチャンはこんな罪を犯しているではないですか、神様を愛していると言いながらこんなにひどいことをしているではないですか、こんなことばを発しているではないですか」と。でも感謝なことにあなたや私には我々を弁護してくださる方がいる。イエス様です。「その罪のために私はもう既に死にました」、「彼らが犯した罪の代価はもう既に私が払いました。」と弁護してくださる。こんなにすばらしい祝福を神は我々救いにあずかった者たちに下さった。でもこの救いを拒んでいる者たちが神のさばきの前に立つ時には、すべてのことが明らかにされ、だれひとりとして彼らを弁護する者はいないのです。

2. さばかれる理由

次にユダはどうして彼らがさばかれるのか、その理由を明らかにしています。原語では大変おもしろい並び方をしています。理由を意味する前置詞で始まるのですが、その前置詞で始まる二つの節が続きます。それも“and”という接続詞でつながれています。ユダはこのように並べることによって、この二つがこの「不敬虔な者たち」がさばきにあう理由なのだということを明らかにしています。

その理由の一つは不敬虔な彼らの行いです。もう一つは彼らの不敬虔なことばです。行いとことば、この二つがこの人たちがさばかれる理由であると言います。

1) 行い

まず15節に「不敬虔な者たちの、神を恐れずに犯した行為のいっさい」と新改訳聖書は訳していま

す。さっき言ったように直訳すると「不敬虔に生きた彼らのすべての不敬虔な行い」となります。不敬虔に生きてきた者たちの人生において犯したすべての不敬虔な行い、それがさばかれる理由だと言います。確かに私たちが生まれながらに神に対して行ってきたこと、不敬虔きわまりない不敬虔の数々です。我々は多くの箇所を見ることができますが、皆さんが一番よくご存じなのは恐らくローマ1章だと思えます。そこを見る時に、私たち人間が主に対してどんな不敬虔な行いをなしてきたのか、21-23節で記されています。「というのは、彼らは、神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからです。彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたちに似た物と代えてしまいました。」と。

(1) 神をあがめない

どんな罪を犯したのかというと、まず神の栄光を辱める罪、神の栄光を汚す罪です。どんなふうに、「神を神としてあがめ」ないとあります。このことばの意味は、本来ならすべての創造主なる神様だけが栄光をお受けになるお方なのに、被造物である私たちがその方に栄光を帰そうとしないということです。ではどんなふうにして私たちは栄光を帰すことができるのかというと、この方を信じ、この方を信頼し、この方に従い、この方をほめたたえることによって、私たちはこの方の栄光を現すことができます。でも私たちはこの方を信じない、信頼しない、従わない、この方をほめたたえない。こうして栄光を帰すべき神に栄光を帰していないと。

(2) 感謝しない

「感謝」をしないと書いてあります。私たちは神である方に栄光を帰すこともなく、神である方に感謝もしないで生きてきた。

(3) 知ろうとしたがらない

28節に「また、彼らが神を知ろうとしたがらないので、」とあります。この「知ろう」というところに使われているギリシャ語の動詞はパウロが大変頻繁に使うことばです。よく検査をして検査の結果それを承認するという意味です。ただ何となく情報を得たというのではない。ここで言われていることは、彼らは神のことを調べた上でこの神を拒んでいると言うのです。神がおられることを知っているのに人々はその神を求めようとしなないし、その方を信じようとしなない。みずからの意思でその方を拒む選択をしていると。「知ろうとしたがらない」というのは、信じたいけど信じられないではないのです。信じたくないから信じないのです。自分自身の決心であるということをはっきりさせるのです。

その後いろいろな悪事が出てきます。「神は彼らを良くない思いに引き渡され」た、つまり彼らが神の救いを、神の罪の赦しのメッセージを幾ら聞いてもそのメッセージを、神自身を拒み続けていく。その結果彼らは罪の深みへとハマっていくということが29節以降に記されています。

ローマ2:5に「あなたは、かたくなさと悔い改めのない心のゆえに、御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現われる日の御怒りを自分のために積み上げている」、そのとおりです。神が私たちから背を向けているのではない。私たちが神に背を向けているのです。神を拒んでいるのは我々罪人なのです。神の救いに対してそれを知ってもそれでもなお我々は神を拒み続けていく。ですからそれにふさわしい報いがあるのだと。不敬虔な者たちの不敬虔な行い。まさにこの行い、その人たちの生き方の話です。神を拒み続けるだけではない、全く神を敬う気持ちもない、信じる気持ちもない。そのような生き方をしている者たち。だから神のさばきに服するのだとユダは教えます。

2) ことば

もう一つは不敬虔なことばゆえにと。15節に「また神を恐れぬ罪人どもが主に言い逆らった無礼のいっさいとについて」とあります。直訳すれば「不敬虔な罪人が神に背いて語ったすべての暴言」です。神に対して不敬虔な者たちが口にした神を汚すひどいことばです。私たちはことばでいろいろな罪を犯します。ヤコブは私たちの舌の恐ろしさをわかりやすく説明しています。ヤコブ3:8-10に「舌を制御することは、だれにもできません。それは少しもじっとしていない悪であり、死の毒に満ちています。私たちは、舌をもって、主であり父である方をほめたたえ、同じ舌をもって、神にかたどって造られた人をのろいます。賛美とのろいが同じ口から出て来るのです。」とあります。そのとおりです。神様が横におられるにもかかわらず、神が耳を覆いたくなるようなことを私たちは平気で口にしていると。神は心を痛めておられる。神はそんなふうには私たちをお造りになったのではない。私たちに口を下させたのは神の真理を語り、神のすばらしさをたたえるためです。でも残念ながら私たちはそれを正しく用いていない。神を賛美するよりも人々を呪ってみたり、悪口を言ってみたり。ですから10節の最後に「私の兄弟たち。このようなことは、あってはなりません。」と、賛美と呪いが同じ口から出てくるようなことがあってはならないと教えています。

この15節の箇所が私たちに教えてくれるのは、不敬虔な者たちがさばきにあうのは、神のみこころ

に反する、神が忌み嫌うことを行い続けている彼らの行いを見れば明らかだと。同時に神が喜ばれることよりも神が喜ばれないことを口にして神を汚してしまう彼らのことばを見れば明らかだと。だから彼らは罪に定められると、ユダは二つの理由を挙げるのです。

B. にせ教師たちの危険性

1. にせ教師たちの罪

16節にユダは再びにせ教師たちの罪を明らかにします。どうしてさばかれるのかその理由を教えてくださいました。そして改めてここで教会の中に入り込んできたにせ教師たちがどんな罪を犯したのか、もっといえばどれほど彼らが危険なのかを教えてくださいます。

1) ぶつぶつ言う者たち

16節に「**彼らはぶつぶつ言う者**」であると書いてあります。つまり彼らは大変不満足な者たちです。満足のない者たちです。満足に代わって彼らはいつも不満に心が満たされています。この「**ぶつぶつ言う**」ということばは新改訳聖書のここにしか出てこないことばです。神に対してぶつぶつ文句を言っている人々です。あのイスラエルの民のことを思い出します。彼らはいままでか行っている時はよかった。でも自分たちの思いどおりに物事が進まないといふ彼らは神に対して文句を言いました。神の教えに対して文句を言うし、また神が立てたリーダーたちに対しても文句を言っていました。あのコラがなぜアロンの家系だけが祭司になるのかと言いました。そうして彼らは神に対して、リーダーたちに対して逆らおうとするのです。民数記16:11に「**それだから、あなたとあなたの仲間のすべては、一つになって主に逆らっているのだ。アロンが何だからといって、彼に対して不平を言うのか。**」と。自分たちがレビ人として幕屋の奉仕にあずかるというすばらしい祝福をいただいていたにもかかわらず彼らは満足しなかった。そしてこのコラのさばきが下った後、イスラエルの人々はどうだったかということと同じ民数記16:41に「**モーセとアロンに向かってつぶやいて言った。『あなたがたは主の民を殺した。』**」とあります。いつまでたっても従順にならないのです。心が満たされていない。我々もよくわかっています。この世のどんな物を手にしたとしても物から得る満足は一時的なものです。満足は神が下さるものです。世の中の満足というのは何を手にするかによって得、それを失うことによって失います。神の下さる満足というのは何を持っていようと、持っていまいと無条件です。自分の望みどおりであろうとなかろうと、私たちは満ち足りた心を持って歩むことが許されています。そのような歩みができるのだということを見れば私たちに教えてくれています。

2) 不平を鳴らす者

二つ目に出てきているのは、「**不平を鳴らす者**」ということばです。この人たちは大変妬みに満ちた人々でした。このことばは「人を責める」という意味です。この「**不平を鳴らす**」ということばも新約聖書のここにしか出てこないことばです。文句を言っている人、常に人をとがめる人、人を責める人、人を非難する人です。常に人のあら探しをする人のことです。人の欠点を探してけちをつけるのです。これはみことばが教えていることと全く違うことです。聖書が私たちに教えるのは自分自身を吟味することです。確かに人の弱いところは目につきます。でも目についていないのは自分の弱いところ。私たちは人を非難することはたやすいです。そして悲しいことに自分が非難されると私たちは腹を立てます。みことばが言っているのは、神は私たちを変えていってください。我々が人々を変えていこうとするのではないのです。我々自身が変わっていくことです。なぜそれが大切かというと、神があなたを通して働かれるからです。私たちはこれまで人を変えることによってすべてのことが好転すると思ってきました。でも聖書が言っているのはあなたが変わればすべてが好転するということです。少なくともあなたを通して神のみわざがなされるからです。ですからみことばは人の歩みを見てそのあらを探して、その欠点を指摘してではなくて、自分自身を吟味しなさい、自分自身のうちにある罪を神の前に告白しながらみことばに従って歩いていきなさいとが教えています。神がなさる働きはあなたを変えていくことです。もちろんそれは天に行くまで続くのですが、神があなたを変えてくださるそのプロセスを通して、過程を通して神のみわざがなされていくのです。その時に私たちは希望を持つのです。我々が自分で何かしようとした時に、特にできないことをしようとした時に希望を持ってません。人を変えましょうなどと思ってもできません。もっと自分を変えましょうと思ってもできない。でもそれができる方がおられる。神なのです。自分を変えていただくために神に働いていただかなければいけない。でもこの人たちは自分たちのことはどうでもよかったのです。彼らの関心は自分たちの周りにいる人々です。彼らの欠点をさらけ出すこと。恐らく、この人たちは先ほどのコラと同じように教会の中にあって恐らく教会のリーダーやいろいろな働きをしている人たちのことを妬んだでしょう。そして、いろいろな批判を繰り返したでしょう。なぜかということ、彼らは妬みに満ちた者たちだからです。

3) 自分の欲望のままに歩む者

三つ目、16節に「**自分の欲望のままに歩んでいます**」と書いてあります。継続して自分の肉の欲望の

ままだに生きています。自分のやりたいことをやっているのです。自分の喜ぶことばかり、自分のやりたいことしかしていない。2ペテロ2：10では「汚れた情欲を燃やし、肉に従って歩み」、そんな人たちです。考えていることはただ一つ、自分の情欲をどうやったら満たすことができるかです。教会の中に入り込んできたこのにせ教師たちはまさにそうだとユダはこれまで教えてくれました。自分たちの欲望に従って生きていく。そういう歩みを彼らはしていたのです。

4) 大きなことを言う者：神の真理を憎む者

四つ目は「その口は大きなことを言い」と書いてあります。この人たちは神の真理を憎む者たちです。というのは「大きなことを言」うというのは「自慢げ」とか「傲慢」だとか「横柄」ということです。神の真理よりも自分たちの考えや知恵に重点を置いているのです。2ペテロ2：18に「彼らは、むなしい大言壮語を吐いており、誤った生き方をしている、ようやくそれをのがれようとしている人々を肉欲と好色によって誘惑し、」と書いてあります。まさにユダが教えたように大きなことを言っている者たちです。18節に「むなしい大言壮語を吐いており」とあります。彼らは真理を語っていません。「むなしい」というのは「全く無益」だ、「空虚」だということです。この人たちは教会の中に入り込んで来て、確かに立派なことを話すのです。聞く者たちが魅了されるような関心を引かれるようなことを話したのです。しかし、それはみんなむなしい絵空事に過ぎなかった。というのは彼らの語っていることが神の真理に立っていない、人間の考えだからです。

「大言壮語を吐いており」と出てきます。横柄な思い上がったかたりだったのです。どういうことかという、この人たちは自分たちがあたかも霊的な者であるかのように振舞っていたのです。自分は特別な真理を知っていると。そうでなければ人々はだまされないのです。快樂のままに生きているこの人たちの生き様だけを見て、だれもその生き方にならおうとはしなかった。でもこの人たちは大変聖書的な知識を持っていて、言うことはすごく立派で説得力があるのです。そうすると、こういう生き方が実は神の前に正しいのではないかと感わされるのです。ですからこのにせ教師たちは巧みな話術をもって、聖書の知識を自分たちの都合に合わせて用いることによって人々を感わしたのです。だから危険なのです。彼らは真理を語らないだけではなく、真理を感わしていました。18節に「誤った生き方をしている、ようやくそれをのがれようとしている人々を肉欲と好色によって誘惑」と書いてあります。この罪の性質から出てくる願望、「肉欲」というのはそういうことです。「好色」というのは不道德なこと、ふしだらな行為、こういった欲望です。にせ教師たちはこういう生き方を行っていただけではない、そういう生き方があたかも神の前に喜ばれるかのように教えることによって、自分たちがそのような生き方をする上での罪悪感を除くだけではなく、人々に混乱をもたらしたのです。私たちはみんな弱者であって、信仰の先輩と言えるような人たちが、聖書のことばをよく知っているような人たちがそんな生き方をした時に確かに弱い人たちはそれによって感わされてしまうでしょう。彼らもやっているのだからそれでいいのではないかと、それが正しいのではないかと。こうしてにせ教師たちが誘惑を与えていたと。

5) 利益のためにへつらう者

最後に「利益のためにへつらって人をほめる」というのが5番目に出てきます。大変利己的な人たちです。このことばはゴマすりです。上の人のご機嫌をとったり、へつらったりすることです。この人たちは、自分の利益のために人が聞きたいことを語ってご機嫌を取るのです。そうすればきっと何か自分に見返りがあると思うのです。神が何と言われているかではない。この人たちが聞きたいことを語って、自分の欲しい物を手に入れようとしていた、そういう人々であると。

2. ユダの勧め

1) 信仰者に対して

16節を見た時に、常に満足がないから不平不満だらけ、妬みを持ち、自分の欲望のままに生き、真理を語らず、私腹を肥やすことしか考えていない、こういう人々が教会に入り込んで来て、自分たちが霊的であるという顔をして、人々を感わしていたのです。だから危険だと言うのです。だからこそユダが教えるように、我々は神様のおことばにしっかりと立たなければいけない。我々が何度も見てきたように、誰が教えるかではない。何が教えられているかです。私たちはどうも立派な人とか著名な人が教えていることは全部真実であるかのように思ってしまう。あえてこんな言い方をしますが、一番偉い方は神です。この方に勝るお方はいない。なぜその方の教えに立とうとしないのでしょうか。こうしてさばきが来るということを明らかにして、だからこそクリスチャンであるあなたたちはしっかりと真理の上に立ち続けていきなさい、感わされてはいけなさいとユダは勧めるのです。

2) まだ救いに至っていない人に

同時に、この救いにまだ至っていない、神の敵である人たち、不敬虔な人たちに対しては間違いなく救いの機会をもたらそうとします。神に逆らう生き方はやめなさい、神に背を向けて生きることはやめなさいと、救いが与えられる今この時に救いを受け入れなさいと。死んでしまったら救いのチャンスは

ありません。生きている間だけです。みことばは我々に確かにそのように教えてくれています。

今いろいろ間違った教えが入り込んできている話をしました。セカンドチャンスという話があります。死んでからでも救いのチャンスがあるという教えです。福音を聞かずに死んだ人々はかわいそうだと彼らは言います。そして神は愛のお方だから死んだ後の人々にも救いの機会を与えてくれると。確かに神は愛のお方です。しかし、神には私たち罪人を救う義務も責任もないのです。我々がこうして救いにあずかっているのは、一方的な神の恵みでしかないのです。この人たちが間違っているところは、罪人は救われて当然である、救われるべきだと思っているところです。だからこの救いを逃した人たちに神がまたチャンスを下さると。確かにみことばの中では「あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられる」、神は忍耐を持ってひとりでも多くの人々が悔い改めて救いにあずかるように待ってくださっていると書いています。2ペテロ3：9です。そしてあなたに対しても私に対しても神は待っていてくださった。神は私たちに何回もチャンスを下さり、そしてこの救いへと導いてくださった。でも救いにあずかったのはたくさんチャンスをいただいたからではありません。救いにあずかったのは神があなたのうちに働いてくださったからです。神があなたの目を開いてくださった、神があなたの罪深さを悟らせてくださった。神があなたに救いが必要であることを悟らせてくださった。神があなたにあなたは自分で自分を救うことができない罪人だということを悟らせてくださった。そして神が備えてくださったイエス・キリストの救いへと神が導いてくださった。

救いを逃したあの人たちはかわいそうだから、神様はその人たちにもう一回チャンスを与える、それは私たち人間が望むことです。でも我々が覚えなければいけないことは、私たちに一番ふさわしいのは救いでも天国でもなく、永遠のさばきであり地獄なのだということです。なぜなら生まれながらにそのように生きてきたからです。きょうも見たように不敬虔な者たちの行いなのです。不敬虔な者たちのことばなのです。すべては神の怒りを受けるにふさわしいものであり、永遠の滅びに至るにふさわしいものです。確かに神の福音を聞かずに死んでしまった人もいます。でもみことばは、だからと言って彼らが神のさばきを逃れることはできないと言います。なぜならば神はこの被造物によってご自身のことを明らかにしてくだっているからです。また神は私たちの心の中に律法を刻んでくださっている。だからある程度正しいことと間違っていることの判断ができるのは人間だけです。そのように神が私たちを造ってくださった。人間は死んだ後、救いにあずかるのか——。あずかりません。生きている間だけなのです。そのようなメッセージが福音派の中でも語られるようになってきた。それが日本のリバイバルの鍵だと言う人もいます。どうして神のみことばに逆らうことで神のリバイバルを期待します？そのようなことを教えているのはそういう人たちだけではない。エホバの証人もそれを教えているのです。あのマルティン・ルターたちが宗教改革を行った時に、ローマカトリック教会が教えたことは、免罪符を買うことによって天国でもない地獄でもない中間の煉獄にいる魂の罪の贖いがなされる、償いが行えるということでした。その聖書的でない教えに対して、神はそんなことを教えていないとルターたちは立ち上がったのです。それが私たちの信仰です。聖書の信仰です。神は我々が生きている間に救いの機会を与えてくださっている。救いにあずかる機会があるのは今だけなのです。そしてこの救いを逃したら、二度とチャンスはありません。

ルカ16章に金持ちとラザロの話が出てきます。金持ちもラザロもふたりとも死にました。そして金持ちが目覚めると、自分は炎の中で苦しみの中にいることに気づいた。見上げてみるとラザロがいて彼は違ったのです。金持ちはラザロを私のところに送ってください、この私の舌を水で冷やしてくれるようにと求めましたが、それがかなわないことに気づいた彼はどうかラザロを私の家に送って、彼らに教えてやってくださいと。そうすると彼らもこんな苦しみのところに来ないから……と、こういう話です。この中で金持ちが自分の罪と救いを受け入れなかったことを本当に神の前に悔い改めているようなメッセージは出てきません。彼らはその炎の中にも自分の罪を悔い改めようとはしないのです。見て来たように信じたくないから信じないのです。なぜなら救いのメッセージを何回聞いても、何回チャンスが与えられても信じたくないことは信じないのです。そしてその責任はその人に帰って来るのです。

だから私たちは、神のみわざを信じてとりなしをしながら福音のメッセージを語り続けていくのです。いろいろな教えが出てきます。でも感謝なことに神は私たちに、これに立ちなさいとこの聖書を下さった。これが私たちの信じるものです。これが神様から与えられた神ご自身のおことばです。しっかりみことばに立つ信仰を持って、この1週間もそれぞれのところで主の証し人として生きていきましょう。